

愛の秩序

金子晴勇著

愛の秩序

金子 晴勇 (かねこ・はるお)

昭和7年静岡県に生まれる。昭和37年京都大学大学院文学研究科博士課程修了。立教大学、国立音楽大学、岡山大学を経て、現在静岡大学教授。文学博士(京都大学)。
〔著訳書〕『ルターの人間学』『アウグスティヌスの人間学』『近代自由思想の源流』『対話的思考』『倫理学講義』『人間の内なる社会』ルター『生と死について——詩篇90篇講解』(以上、創文社)アウグスティヌス『ペラギウス派駁論集I、II』(教文館)外

愛の秩序

ISBN4-423-10084-3

1989年12月10日 第1刷発行

1994年4月15日 第2刷発行

著 者 金 子 晴 勇

発行者 久 保 井 浩 俊

印刷者 中 内 康 児

定価 2575 円 (本体 2500 円)

発 行 所 株式会社 創 文 社

本 社 〒102 東京都千代田区一番町 17-3

仮事務所 〒112 東京都文京区関口 1-44-7

電話 03-3235-4361

振替 東 京 2-92472

Printed in Japan

暁印刷・鈴木製本

目 次

I	愛には秩序があるか	三
1	愛の本質への問い	三
2	人間の全体的表現としての愛	八
3	人倫と愛の秩序	二三
II	愛の諸類型について	二七
1	エロースの諸形態	二八
	ホメロスからソクラテスまで	
	オウィディウス	
	プラトン	
	エピクロス	
	ルクレティウス	
2	フィリア（友愛）	三五
	プラトン	
	アリストテレス	
	エピクロス派とストア派	
	キケロ	
	プルタルコス	
3	アガペーとカリタス	四八
	新約聖書のアガペー	
	アウグスティヌスのカリタス	

4	宮廷的恋愛	五
5	ロマンティックな愛	七
	ダンテ ペトラルカ タッソからゲーテへ	
6	自然主義的愛	八

III 愛の秩序の思想

I	プラトン主義	九
	プラトン プルタルコス プロティノス フィチーノとエラスムス	
2	アウグスティヌス	一〇
	「愛の秩序」の定義 三つの愛の順序 性愛の秩序 享受と使用	
	時間の秩序と愛の秩序の完成 火の論理	
3	中世思想とルター	一四
	クレルヴォーのベルナル トマス・アクィナス ドウンス・スコトゥス	
	マルティン・ルター	
4	パスカルとキルケゴール	一六
	パスカルと愛の情念 三つの秩序 キルケゴールの愛の三段階 隣人愛の概念	
5	マックス・シェーラー	一八

注		三〇三
あとがき		三〇九
索引		156

愛の秩序

I 愛には秩序があるか

I 愛には秩序があるか

I 愛の本質への問い

日本語の「愛」という言葉はこれまで一般的に言つてあまりに男女間の関係に限定されて用いられる傾向がありました。ですからこの言葉を用いると何かしら恥ずかしいような気持がしたものです。しかし、男女間の愛には「恋愛」という言葉がありますし、また異性に対する愛には「性愛」という言葉も使われてきています。さらに日本語には「親子の愛」「友愛」「祖国愛」「真理愛」などといったそう広い人間関係や高い価値に惹き寄せられる心情を表現する言葉がよく使われています。ですからこの広い意味で私たちは「愛」という言葉を使用したいと思います。そうするとどうでしょう。「愛には秩序があるか」という問いはどのように受けとられますか。

愛には秩序などあるはずがない、という声がどこからともなく聞こえてきます。親を大切に思うのも、恋人を慕うのも、友人を好むのも私たちは自分の自由な発意からしているのであって、そこには既に出来あがった仕来りや取り決めなどはないし、ましてや秩序などありはしない、と考えられています。こういう考えをもっと進めて、今日では社会にある愛の習俗や秩序を破壊することに生活の真なる姿や生きがい

があると説く人たちも多くあります。愛の習俗や秩序を否定するだけに終始する場合には、この人たちは社会から遊離した過激な活動家となって、ほとんど無意味な存在となります。また否定をとおして新しい生き方を確立してゆく場合には、そこから新しい習俗や秩序が形成されてゆきます。ですから秩序を否定するだけではかえってその秩序に依存していることになってしまふのです。實際、愛は何かを単に否定するだけに留まりうるものではなく、否定の破壊作用をとおして新しい存在を創造し、秩序を形成する働きを本質において持っているといえましょう。ですから愛には秩序がないと答えることは、現実を否定する愛でも、より高い肯定を目指している以上、原則的に不可能であると考えられます。ゲーテは「心しずかにあたりを見るものは、いかに愛の心を高むるかを知る」とかつて言いました。この愛がいかに秩序を創造してゆくかを私たちはこれから考察してゆきたいと思います。

古来、人と人との間の関係には私たちが従うべき秩序があり、それが「人倫」として説かれてきました。たとえば儒教的規範たる「五倫五常」の説は江戸時代このかた日本において牢固たる地位を占めてきています。人間関係には五つの不変の秩序があるとそれは言うのです。父子関係には「親」（したしみ）が、君臣関係には「義」（忠義）が、夫婦の間には「別」（けじめ）が、朋友関係には「信」（信頼）が、長幼の間には「序」（順序）があると説かれています。この「五倫」こそ封建社会における人と人との間にある秩序の内容（宇宙的天理であり同時に本然の性）であり、人はこの秩序に従って生きなければならぬ、と私たちは教えられたのでした。しかし、今日私たちのうちでこのような古い儒教の教えを金科玉条のごとく遵守する人がいるでしょうか。また古い教えに自分の生き方を合わせたり、社会の習俗に自分を適合

させたりすることが、私たちの倫理といえるでしょうか。

たしかに私たちは現代人はすべての行動を自分自身の考えから自由に起こしてゆくことを願っており、主体的に行動すべきであるとの確信に満ちています。それゆえ先の儒教規範に対し国学思想は「人欲も天理ならずや」（直隸靈）と反論しています。しかし自由といっても、無制限な自由などどこにもなく、私たち人間であるかぎり、動物としての生体の秩序に服している基本的事実は承認しなければなりません。生体の秩序は私たちの自然的本能の中に具わっているもので、自然の秩序を無視して愛を論じることとは不可能です。

自然の働きの中でも私たちの心には他人に同情したり、一緒に喜んだりする、共歎共苦の機能が自然に具わっています。喜んでいる人と一緒に喜ぶと歓喜は二倍になり、悲しんでいる人と一緒に悲しむと、悲しみは半分になります。この共感の機能は自然の高貴な働きとして与えられています。このように心の機能へ愛をすべて還元できないにしても、この機能を無視して愛を語るわけにはいきません。

このような自然の秩序や機能が私たちのなかに生具的に存在しているばかりでなく、大きな愛の流れの中に私たちはおかれているのではないのでしょうか。私たちは両親の愛の中に生を享け、育まれており、兄弟姉妹の愛、隣人の愛、友愛、恋愛、同胞愛、祖国愛、人類愛、神の愛という幾重にも重ねられた多様な関係から成る愛の大きな流れの中から現在の自己を形成してきているのではないのでしょうか。

私たちは人と人との間の関係がうまくいっている時には、秩序の必要性を感じたりしません。しかし、ひとたび友人や仲間、また異性との関係がうまく行かなくなると、とりわけ「交わりに対する不満」（ヤ

スパース）を感じるようになると、本来あるべき人間関係としての秩序を強く意識するようになるのではないでしょうか。このような不満を契機にして私たちは人間関係を全体としてもう一度考え直すことになります。そのとき愛を哲学的に考察する出発点に私たちが立っているのを見いだすのではないのでしょうか。

ところで愛は多様な形態をとって現象しているだけでなく、各人が各様にそれを体験しているため、その理解も多様となり、とてもその本質に達することはできそうもありません。愛についてすべての人が勝手に考えているのでは、ソクラテスにならって「定義する」ことなど、とうてい考えられません。また、たとえ定義したとしても、それによっては説明できない残余がいつも残ってしまいます。そこで多様な形態をとって現象している愛の不変の姿をどのようにして把握したらよいのか、という方法の問題が大切になります。一般的に言って「定義」というのは定義しようとする対象よりも上位の概念に種差を加えて作ります。たとえば人間を定義するときには、それより上位の「動物」に種差「理性」を加えて、「人間トハ理性的動物ナリ」というふうに作るのです。だが、こういう言葉の操作によってはとても生きた愛の本質を捉えることはできません。ここでは愛という現象にどこまでも即してその本質に迫りたいと思います。まず愛は親の愛、兄弟の愛、恋愛等々と多様な人間関係を表現しておりながら、その多様な形態をつらぬいて「愛」として規定されている点に注目しましょう。多様で別々のものでありながら、なにゆえに同一の言葉「愛」が用いられているのでしょうか。多様なものが一つの愛の表現であり、この一つの愛の姿が、ときには姿を現わし、ときには姿を隠しながらも、いつも同じ姿をもって現象している事実私たちは着目したいと思います。この事実は日常の経験に与えられているものです。しかし同時に私たちを取り巻く

現実の資本主義社会では愛がいかにゆがめられた仕方で経験されているかということも批判的に説明されなければなりません。

愛の本質への問いにとって次に問題となるのは愛を欲望と同一視する見方です。愛の自然主義的理論はフロイトによって現代でも大変有力な学説となっており、愛の現象を性欲に還元しようとしています。異性に対する愛が生体の機能と密接にかかわっているかぎり、愛と欲望、もしくは衝動との関係には最も重大な関心が寄せられなければなりません。そして事実、愛の衝撃的な体験をするのは若い時の恋愛においてであって、そのときに生体の機能も成熟してきていることに注目すべきでしょう。小学校のときに仲良く手をつないで遊んでいた友だちが急に異性として意識されるのは、心理的には異物が突然侵入してきたように感じられます。しかし、身体的には成熟し、いわゆる仲良し時代から恋愛時代に突入しているのです。が、このことを若い人たちは性欲の発作として感じとっています。この友愛から恋愛への急激な変化は性欲にすべて起因しているのでしょうか。というのは友愛は身体的絆をほとんど伴っていないのに、恋愛は身体的生殖機能と関わり、強烈な欲望がそこに働いているのを認めざるを得ないからです。

ところが愛と欲望とが同伴しているのは恋愛だけではないのです。たとえばお金に対する愛、つまり金銭愛や、人を支配したいという権力欲というのもあります。ですから愛は異性・金・地位・名誉・権力と結びついて、激しい欲望をともなつて猛威をふるうということがいつも起こっています。こうして異性・金銭・権力といった肉体的・物質的なものに愛が深くとらわれてしまうと、愛はいつのまにか欲望に変質して、自分の姿を完全に見失ってしまうのではないのでしょうか。シェイクスピアの『ヴェニスの商人』に

登場するシャイロックのことを考えてみて下さい。「金だ、金だ、金だ」と叫ぶユダヤ人シャイロックはキリスト教徒に対する復讐心からアントーニオの肉一ポンドと引換えに三千ダカットを貸し、復讐欲の塊となり、愛はその姿を全く消してしまいます。またドストエフスキーの『悪霊』に登場するスタヴローギンは本来優しい心の持ち主であったのに、快楽の陶酔をあぐことなく追求し、次々に犯罪を重ねてゆきます。

さらに恋愛を欲望と同一視する傾向は日本人のなかにも古くから根づいたものであったかも知れません。伊藤整の「近代日本における『愛』の虚偽」という論文はこのことを説いているように思われます。彼によると明治以来西洋文化の影響により男女や夫婦の恋愛が「愛」というキリスト教的な意味をもった言葉で表現されたところに虚偽があるようです。たしかに日本にはキリスト教的な愛の観念はなかったし、愛という言葉で男女の恋愛関係を主として表現してきたのも事実です。しかし、この恋愛としての愛を仏教の慈悲からも、儒教の仁愛からも切り離して、「肉体の強力な結びつき」や「相互利用の関係」、さらに「主我的人間の攻守同盟の結びつき」に限定してしまうことは、日本人の心を表現しているよりも、D・H・ロレンスの翻訳者伊藤整の人生観の表明ではないでしょうか。^{*}愛を身体的欲望や衝動に還元する自然主義的愛の理論は愛の現象の一面のみを強調しているにすぎません。

2 人間の全体的表現としての愛

これまでお話してきたのは愛を身体的欲望に還元しようとする今日最も一般的に支持されている考え方

でした。愛の外面的な現象は多分そのように見えるかも知れません。精神的に貧しい私たち日本人の現実
は事実このようになりがちです。多くの作家はこの現実を描いているし、俗悪な雑誌やマンガもこの範囲
を出ないこともまた事実です。しかし、身体的欲望がどんなに勢力をふるっているとしても、この欲望の
みを追求するとしたらどうなるでしょうか。欲望は悪無限であります。つまり、欲望を満たそうとすれば
するほど、渇きが高まってきます。それはちょうどボートで漂流している人が喉が渴いたからといって塩
水をのむようなものです。このように欲望にしたがう快樂主義は自己破壊を自らに招来してしまうのです。
昔から快樂主義のこの自己破壊の恐ろしさを人々は避けようとして、欲望をコントロールする方法を求
めてきました。たとえばストア派の賢者たちは理性によつて欲望と情念を支配することを説き、ほかには
厳しい禁欲主義に走った人たちがおりますし、快樂主義の元祖エピクロスでさえも欲望を分類し自然的で
必須なものとするでないものとを区別しています*。

そこで私たちは人間的な愛を人間存在の全体的な表現として理解する見方をとりあげてみましょう。身
体は立居振舞を含めてすぐれた表現力を持ち、心身一如の世界を創造しています。これらの表現を生み出
す感性は、同時に理性や霊性をも間接的に提示しているのではないのでしょうか。「目は心の窓」というよ
うに、とりわけ目はその人の内心を表現し、死んだような目もあるし、キラキラと輝く目もあります。

愛もまたこのような身体と精神とからなる人間の全体の表現であるとする、感性・理性・霊性を見え
た全人的自己表現にはかなりません。ここでは愛は深い静かな湖のような姿をとって現われています。風
が強く吹きつけ湖水の表面は波立っても、決して泡立つまでに動揺することはないでしょう。そして静か

であればあるほど湖の底は深いのです。静けさと深みとはここでは一つになっています。しかも、湖の奥底から泉が湧き、汚水が湖に注がれていなければ、水は澄み切って美しさを増してきます。富士五湖のことを考えてみましょう。それは大変美しい湖で、富士山麓の高原にありますから、汚水は入らず、富士山に積った雪や降った雨水が還流して泉となって湖底から湧き出ております。靈峰富士の姿は五つの湖の水面に美しく映っておりますが、単に外的に映っているだけでなく、奥底において水脈が富士山につながっていることになります。

私たちの愛も同じような構造をもっていないでしょうか。愛が身体的欲望とか感性によって衝撃を受けると私たちは動揺しますが、同時に理性が働いてこの衝撃を秩序づけ、靈性が正しい方向に導くのではないのでしょうか。また私たちの心の深みには神の愛が注がれており、この愛を受けて心は新たにされ、他者に対し愛のわざに励むことが起こっているのではないのでしょうか。そして今日私たち日本人にとって大切なことは愛を欲望にのみ還元するような偏った世界観を退け、人間関係全体に愛の射程を広げていくことにより、愛の秩序を確立することではないでしょうか。

そのことをお話する前に「靈性」についてすこし説明しておきましょう。「靈性」(spirituality, Geist, spiritus)というのは一般的には「内面性」や「心」のことです。人間は感性と理性とから成るとこれまで哲学的に説明されてきましたが、今日理性が技術化されて、いわゆる分析・比較・総合をなす「悟性」に限定される傾向が強くなってきました。だがその反動で今度は理性の技術化できない深み、つまり「心」や「内面性」に対する認識が求められるようになりました。たとえば近代的知性の人バスカルはこ